
東京外国語大学

ICS 7—2003

総合文化研究所

2003 年度所員活動報告

荒このみ

論文

1. 「ニューヨーク——ハーレム文化とプリミティヴィズム／エグゾティシズム」203 - 240. 荒 このみ編著書『7つの都市の物語』NTT出版, 248頁. (まえがき「パラダイムシフトを予感する」) 収録.
2. 「『アフリカ』を演じる——パリのジョセフィーヌ・ベイカー」36 - 52. 総合文化研究, Vol. 6. 東京外国語大学総合文化研究所, 224頁.
3. “America----Homoglossic or Heteroglossic?”, 33 - 47. *The Japanese Journal of American Studies*, No.14. The Japanese Association for American Studies.151頁.
4. 「アメリカン・ヴァンダリズム」51-57. 猿谷要編『アメリカよ!』弘文堂, 231頁. 収録.

翻訳

- 「マリオ・バルガス＝リョサとの往復書簡」99 - 110. 大江健三郎著『大江健三郎往復書簡・暴力に逆らって書く』朝日新聞社, 307頁. 収録.

エッセイ

1. 「アルファベットの基準」1. アメリカ学会会報, No. 148. アメリカ学会.
2. 「灰色のマクドナルド」26 - 27. 月刊健康, 7月号. 共同通信社.
3. 「『作者の死』——口承のネイティヴ・アメリカン文学」18-21. 国文学, 8月号 (学燈社)

書評

1. V・S・ナイポール著 梅・山本訳『中心の発見』(草思社). 図書新聞 (2003. 3. 8.)
2. アリス・ウォーカー著 柳沢由美子訳『勇敢な娘たちに』(集英社). 産経新聞 (2003. 5. 19.)
3. デニス・ボック著 小川高義訳『灰の庭』(河出書房新社). 週刊読書人 (2003. 6. 6.)
4. Louise Erdrich. *The Master Butchers Singing Club* (New York: Harper Collins, 2003). 東京新聞「世界の文学」(2003. 6. 19.)
5. ナット・ヘントフ著 藤永康政訳『アメリカ、自由の名のもとに』(岩波書店). 秋田新聞・中国新聞等 (共同通信配信). (2003. 7. 13.)
6. Toni Morrison. *Who's Got Game? The Ant or the Grasshopper?* (New York: Scribner, 2003). i feel (アイ・フィール) No. 26. 紀伊国屋書店. (2003. 11. 1.)

研究発表・シンポジウム

1. 「『ビラヴド』におけるアメリカン・ホロコーストの実相」. シンポジウム「〈アメリカン・ホロコースト〉と文学」報告者. 日本アメリカ学会第37回年次大会・6月1日 (開催期間. 6月1～2日) (神戸大学).
2. “Fragmentary Primer in The Bluest Eye: A New Learning through Pecola.” Third Biennial Conference of the Toni Morrison Society, Washington, D.C. 6月27日 (開催期間. 6月26～29日)
3. 「ネイティヴ・アメリカンと第二次大戦——レスリー・M・シルコウ著『儀式』を中心に」.

シンポジウム「戦争と平和の文学」報告者、世界文学大会・7月25日（青学会館）、
座談会

1. 「ペリー来航150年・日米関係を考える」上下、（その他の参加者・岡崎久彦・村田晃嗣）、
読売新聞（8月11日・12日）

岩崎務

【研究調査】

- ・科学研究費補助金基盤研究（C）（2）「家郷喪失者」の観点による古代ローマ詩比較研究（研究代表者）
- ・科学研究費補助金基盤研究（B）（2）中世西欧文学の「間テクスト性」に関する文献学的・言語学的研究（研究分担者）

【講演】

調布市市民カレッジ「地球ナビゲーションⅡ『歴史の中に見る地中海沿岸ヨーロッパ都市』」
第二回「永遠の都ローマ——カピトリーウムの丘をめぐる——」

【監修】

『ギリシアの文字と言葉』（『世界の文字と言葉入門』全15巻シリーズ中第8巻、小峰書店、
近刊） 小学生高学年から中学生、一部高校生に向けた図書です。

亀山郁夫

【著書】

『熱狂とユーフォリア——スターリン学のための序章』（平凡社、11月17日、540頁）

【エッセー】

「ショスタコーヴィチ交響曲第1番他」（「定期演奏会プログラム」NHK交響楽団、1月）

「プロコフィエフの生涯と国家」（『レコード芸術』3月号）

「プロコフィエフ交響曲第5番」（『プログラム』東京都交響楽団、5月）

「プロコフィエフ『ロメオとジュリエット』他」（「定期演奏会プログラム」NHK交響楽団、
6月）

「場所の天才、または聖ペテルブルグの守護神たち」（『ACT4』、5月）

「引用の烙印」（月刊『言語』5月）

「3＋1、原点としての1948年」（『トッパンホール』月報、8月）

「山崎伸子、ヴァディム・サハロフ・デュオ・リサイタル——曲目解説」（トッパンホール、

11月7日)

「ビバ！ 聖ペテルブルグ建都300年」(マリインスキー歌劇場来日公演プログラム、11月15日)

「スターリノロジーのために(1)」(『総合文化研究ブックレット』1号、11月)

「スターリノロジーのために(2)」(同、11月)

【連載】

「プロコフィエフとスターリン権力」(『レコード芸術』10月～12月)

【インタビュー】

「直伝の力——ルドルフ・バルシャイ」(『レコード芸術』4月号)

【CD批評】

「ショスタコーヴィチ交響曲第7番／ゲルギエフ指揮キーロフ管・ロッテルダム・フィル」(『レコード芸術』4月号)

【新聞エッセー】

「没後50年に思う《スターリン学》」(『朝日新聞』4月7日)

「スターリン没後50年」(「21世紀を読む」、『毎日新聞』朝刊、6月)

「《歴史の疲労》映す」「21世紀地球の顔・サンクトペテルブルグ」(読売新聞、8月)

【書評】

メドヴェージェフ『知られざるスターリン』(『産経新聞』6月)

大石雅彦『マレーヴィチ考』(『週間読書人』8月)

【講演】

「恐怖という詩神——スターリンと芸術家たち」(「大佛次郎賞記念講演会」、横浜市開港記念館、2月23日)

「ドストエフスキー『悪霊』について」(京都精華大学、3月1日)

「わたしとロシア、磔のロシア」(宇都宮市ニューイタヤホテル、3月15日)

「文学と文化のスターリン学構築に向けて」(日本学術会議、6月20日)

「プロコフィエフとスターリン」(シンポジウム「文化としてのスターリン時代」7月4日、本郷・東京大学)

「母性・悪霊・運命——スターリノロジーの視点からみるタルコフスキーの『鏡』」7月19日、北海道大学スラブ研究センター)

【ロシア文化セミナー】

「《レーニン廟》の地下から見るロシア」(1月4日、本郷サテライト)

「ドストエフスキー『悪霊』について」(3月29日、本郷サテライト)

「ドストエフスキー『罪と罰』について」(5月31日、本郷サテライト)

「エロスとしての病——チェーホフのペシミズム」(7月27日、本郷サテライト)

「エロスとしての病2——チェーホフのペシミズム」(10月4日、本郷サテライト)

「熱狂とユーフォリア1」(12月13日、本郷サテライト)

【シンポジウム】

「スターリンとは何だったのか？」（東京大学本郷キャンパス、7月4日）

「プロコフィエフ、戦争と平和、スターリン」（キーロフ友の会主催、ロシア大使館、10月18日）

「ヴィヴァ！ 聖ペテルブルグの魅力を語る」（日本ロシア文学会主催、大阪国際交流センター、10月31日）

「終末と革命のペテルブルグ」（東京外国語大学中野健三基金シンポジウム、12月2日）

【テレビ、ラジオ出演・新聞インタビュー】

「スターリン没後50年」（NHKラジオ第一放送、3月4日）

「20世紀の抒情を求めて——プロコフィエフ没後50年」（NHKFM、8月11日）

「プロコフィエフ・フェスティバル——ゲルギエフ・キーロフ歌劇場管弦楽団演奏会」（NHKFM、9月13日）

「知られざるロシア・アヴァンギャルドの遺産」（NHKハイビジョンスペシャル、11月17日）

「スターリン学を提唱」（読売新聞、12月2日）

「NHK交響楽団定期演奏会」（NHKFM、12月6日）

《回顧》

没後50年を迎えたスターリンとプロコフィエフに振り返られた一年でした。2004年には、折をみてかれこれ過去5年間にわたって書きとめてきた『ドストエフスキー論』（NHK出版）がようやく完成します。これは純粋に私的な意味をもった仕事であり、ドストエフスキー学への貢献といえるものではありません。しかし、いくつか自負できる発見があります。また、「プロコフィエフとスターリン権力」（『レコード芸術』連載）を今年9月あたりでけりをつけ、2006年に予定している『ショスタコーヴィチ伝』の仕事に結びつけたいと思っています。最後に上に挙げた活動一覧のなかで、いくつかのデータに関して細部が埋まらなかったことを付け加えておきたい。

加藤雄二

今年度は文部科学省科学研究費への応募のタイトルでもある「アメリカ文学の比較文化的研究」の初年度にもあたり、6月にマウイ島での国際ハーマン・メルヴィル学会に参加。コンファレンスのメイン・タイトルは「メルヴィルと太平洋地帯」だった。“Post-World War II Japanese Gamming With Herman Melville”というタイトルで口頭発表。

夏からは同メルヴィル学会のコンファレンス・プロシーディングズに掲載される論文の執筆にとりかかる。戦前の阿部知二による日本最初のメルヴィルの紹介と阿部と同時代の小林秀雄らのロマン派的な文学的言説が、ロマンティシズムにたいして脱構築的であるメルヴィルの作品と齟齬をきたす様子を分析、記録しようとする。

本業のアメリカ文学だけではなく日本文学にコメントすることになり、非専門家として

の不安はあるが、みずからの課題でもあるメルヴィル研究をいかに行いうるかを考察し、小林秀雄から三島由紀夫、大江健三郎など日本文学全般とアメリカ文学との関わりかたを確認する機会にはなったと思う。

冬休みには、来年度以降の研究のための資料収集を目的として、科学研究費による出張。サンフランシスコのバークレーとニュー・ヨークのコロンビア大学図書館および周辺の書店で、おもに批評理論関係の文献を探す。『総合文化研究』に論文を寄稿しようとするが、こちらは時間がなく断念。アメリカのスコット・フィッツジェラルド学会に発表概要を提出。一応の返答はきているが、コンファレンス・コミッティーの審査を待っている状態。審査を通過した場合には、“Tender Is the Nightmare: Haruki Murakami’s Appropriation of Francis Scott Fitzgerald and the Contextual Importance of His Works in Japan” というタイトルでの口頭発表をすることになる。

メルヴィル学会とその後の原稿執筆に集中しようとした一年だったと総括できるにしても、比較論的な文章ばかりを書く結果になっていることや、遅筆と論文執筆数の少なさに関しては、いつもながら慚愧の念に耐えず、重大な反省材料となる。

川口健一

〈分担執筆〉

「ハノイ 西欧化と民族文化の創出」『7つの都市の物語』（荒このみ編著、NTT 出版、pp.35-66, p.248, 2003 年 3 月 18 日）

〈エッセイ〉

「ベトナムの現状」、『自由のために書く—中国亡命作家鄭義と大江健三郎の対話—』（社団法人日本ペンクラブ、第 23 回 WiP（ライターズ・イン・プリズン）の日パンフレット、pp.22-23, 2003 年 10 月 7 日）

〈セミナー〉

国際交流基金のプログラムでベトナムから迎えた研究者を発表者に、次のような 3 回のセミナーを開催した。

第 1 回「ベトナム文学における戦争のテーマ」（5 月 23 日）

第 2 回「ベトナム文学におけるドイ・モイ（刷新）の現在」（6 月 20 日）

第 3 回「現代ベトナムの若手作家と女性作家」（7 月 18 日）

場所：東京外国語大学本郷サテライト

菊池陽子

【概説書（共著）】

「第6章 現代の歴史」 ラオス文化研究所編『ラオス概説』めこん 2003年7月 pp.151
- 170

【年表】

早稲田大学アジア太平洋研究センター 「戦後日本・東南アジア関係史総合年表」編集委員
会編『戦後日本・東南アジア関係史総合年表』龍溪書舎 2003年5月
ラオス部分担当

栗田博之

・論文：統制された比較

『民族学研究』第68巻第2号に掲載された。久し振りに学会誌に投稿した本格的論文。「比較」という方法の可能性(不可能性)を論じたが、まだまだ奥が深そうである。

・翻訳：なし

日本民族学会の研究大会が、本学(AA研)が当番校となって、2004年6月に開催される。久し振りの東京開催になるため、参加・発表の申込みが殺到。準備委員として多忙を極めた。大会が終了するまで、当分息をつけそうにない。

真鍋求

人が運動を行うとき、例えばジョギングやウォーキングあるいはスイミングなど行うとき、個々人で運動を行いやすいリズムやピッチが存在する。一般的には「運動のペース」ということであり、最適な運動リズムと運動の効率(後述)との関係が想定される。この運動とリズムあるいはピッチと、運動効率を調べるため、これまで千葉大学との共同研究において様々な運動様式において、ピッチを変化させてガス代謝の応答を検討してきた。本年度はこれらを総括する意味で、とりわけ自転車エルゴメータを用いて行った一連の実験をまとめる作業を行った。

我々が行う運動とそれによって消費されるエネルギーを考えると、厳密に言うたとえば自転車を漕ぐような単純な運動を例にとっても、消費される全エネルギーは、以下の要素を含んでいる。

①基礎代謝として消費されるエネルギー

②無負荷条件で消費されるエネルギー

③ペダリングで消費される実質分のエネルギー

・GE (Gross efficiency)：全エネルギー消費に対して、成された仕事(量)を示す。

・NE (Net efficiency)：安静より上(基礎代謝分を補正した)のエネルギー消費に対して、成された仕事(量)との比を示す。

- ・ WE (Work efficiency)：無負荷運動で消費される分を補正したエネルギー消費に対して、成された仕事（量）との比を示す。
- ・ DE (Delta efficiency)：エネルギー消費の増加分に対する、成された仕事（量）の増加分の比として定義される。

一般的に効率とは仕事を行うのに消費されたエネルギーに対して、成された仕事（量）との比として定義される。しかし代謝の詳細について考えると上述のような様々な概念が存在する。これらの定義は多くの研究者によって議論されるなかで用いられてきたが、一致した結論に至っていない。そこで今回はこれらの定義あるいは要素を明確に区別しながら、運動のリズム・ピッチと効率の関係を明らかにすることを目的とした。

具体的には次のような実験手順で研究を行った。

- ①自転車エルゴメータに座った状態で5分間安静を取る。
 - ②ペダルの負荷「0」で5分間ペダルを漕ぐ。
 - ③それに続いて換気性作業閾値の50%、75%、100%強度の3種類の負荷で、それぞれ60 rpm（1分間当たり60回転）、80 rpm（同80回転）、100 rpm（同100回転）の異なる回転速度（ピッチ）でペダルを漕いだ場合のガス代謝応答を調べた。
- これらの実験から以下のような3点の結果が得られた。

（1）負荷「0」の場合の、ピッチと酸素摂取量の関係

ペダリングの回転速度と、負荷ゼロの仕事率における単位体重当たりの酸素摂取量と関係を見ると、ペダリングの回転速度が上がるにつれて酸素摂取量が増加した。これは統計的（ $p < 0.01$ ）に有意であることが示された。

（2）回転速度とWEの関係

それぞれの仕事率におけるWEの量とペダリングの回転頻度との関係を見ると、ペダリングの回転頻度が増加すると、WEが減少する傾向が見られた。これは統計的（ $p < 0.01 \sim 0.05$ ）に有意であることが示された。

（3）回転速度と負荷をかけた場合のWEの関係

仕事率と各ペダリングの回転速度のWEとの関係は、仕事率の増加に伴って増加していることが示された。これは統計的（ $p < 0.01 \sim 0.05$ ）に有意であることが示された。この結果はGEやNEで示された結果と同様であった。

これらの結果から、効率を上げるために最適な運動リズムがあることが示された。ふだん我々は経験的に効率の良い強度とリズムで運動を行っていることが予想される。今後の検討をまた待たねばならないが、これらは筋肉の収縮と心臓を中心とした大循環と、あるいは運動様式によっては衝撃（例えばランニング時の足の接地にともなうもの）との関係があるものと推測された。

『モンゴル文学への誘い』、明石書店、2003 年 10 月 28 日、p.356（芝山豊と共編）。

【記 事】

「『反逆』の詩人レンチニー・チョイノム」『蒙古婦女——献母親節礼物（蒙文版）』（却諾木等著、孟克達来編）、天馬図書有限公司、香港、2003 年 7 月、p.217。

【報 告】

「第 8 回国際モンゴル学会大会報告——文学関係」『日本モンゴル学会紀要』、第 33 号、2003 年 3 月 31 日、pp.112-113。

岡田知子

【翻訳】

- ・『カンボジア 花のゆくえ』段々社、2003 年。

【その他】

- ・「カンボジア語基礎語彙」上田広美共著『東南アジア大陸部言語調査票（カンボジア語、ラオス語、タイ語、ベトナム語）』東京外国語大学（科学研究費補助金報告書）、2003 年、pp1-66。
- ・「サオチ語の基礎語彙」上田広美共著『東南アジア大陸部諸言語に関する調査研究』（環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究シリーズ、文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」、2003 年、pp77-103。
- ・「激動の現代史を生きた女性作家のカンボジア」開高健記念アジア作家講演会シリーズ 13、カンボジア、パル・ヴァンナリーレアク講演会配布資料監修、独立行政法人国際交流基金アジアセンター、2003 年。

【共同研究】

- ・慶應義塾大学言語文化研究所「東南アジア諸言語研究」カンボジア語担当。
- ・21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点 TUFSS 言語モジュール」カンボジア語協力。

【社会における活動】

- ・東京外国語大学総合文化研究所公開講座「世界の神々」（2003 年度第 3 回目担当、会場：総合文化研究所）
- ・特定非営利活動法人幼い難民を考える会「チャリティ語学講座 カンボジア語入門」（2003 年 7 月～9 月、第 2 回、第 4 回、第 6 回担当、会場：聖心女子大学）
- ・開高健記念アジア作家講演会シリーズ 13、カンボジア、パル・ヴァンナリーレアク講演会コーディネーター（2003 年 11 月 3 日山梨県立文学館、同年 11 月 6 日熊本市国際交流会館、同年 11 月 13 日国際交流基金フォーラム）

佐々木あや乃

学位論文 (テヘラン大学にて 2003 年 4 月 30 日口述試験合格)

“Simā-ye jāme‘e va naqd‘e ejtema‘i dar she‘r-e Hāfez” (ペルシア語)

(タイトル和訳 : 「ハーフェズの詩的世界における社会の諸相と社会批判」), 395p.

学会発表

「ハーフェズのガザルにおける「弊衣」

日本オリエント学会第 45 回大会 2003 年 10 月 26 日於金沢大学角間キャンパス

その他

大学公開講座「イラン文化講座」(2003 年 10 月 4 日～11 月 29 日の 10 月 25 日を除く毎週土曜日開講)のうち、11 月 1 日、8 日、15 日を担当。イスラーム期以降 14 世紀までのペルシア文学史、イラン民族英雄叙事詩の『シャーナーメ』、14 世紀の抒情詩の巨匠ハーフェズの作品についての講義をおこなった。

柴田勝二

三島由紀夫についてまとめてから、夏目漱石や谷崎潤一郎にも研究の対象を拡げておりますが、研究の視角としては物語に対する理論を独自に考えたいと思っております。物語とは結局過去における自他の経験を、現在の意識によって語り直すことであり、そこに二つの時間と結びついた表象の交錯と寓意化がおこってきますが、基本的にはその視角によって近代から現代に至る物語・小説を位置づけることができると考えています。すでにその視角による論考を何点か書いていますが、2003 年中に、一冊の本にまとめたいと思っております。2003 年に発表した論文等は以下の通りです。

〈論文〉

- ・「審美的な兵士——『野火』の狂気と倫理」(「敍説」Ⅱ—05、pp.103-117, 2003・1)
- ・「遡行する身体——『痴人の愛』の文化批判」(「東京外国語大学論集」65号、pp.136-150, 2003・3)
- ・「〈鏡〉のなかの世界——『個人的な体験』のイメージ構築」(「東京外国語大学論集」66号、pp.25-38, 2003・11)
- ・「生きつづける「過去」——『夢十夜』の表象と時間」(「敍説」Ⅱ—06、pp.193-210, 2003・8)
- ・「語り直す機構——〈機能としての作者〉と『舞姫』」(「敍説」Ⅱ—07、pp.60-81, 2003・12)

〈共著等〉

- ・『野火』作品論集』（亀井秀雄編、クレス出版、2003・6）（前出「審美的な兵士」—『野火』の狂気と倫理」の再録）

蕭幸君

外語大での勤務は今年が最後の年となる。長年、勉学生活を続けてきた母校であり、はじめて教鞭を執った大学でもあるので、名残惜しさが半分、巣立っていく嬉しさが半分というのが、正直な気持ちである。新しいスタートを切る段階に立って初めて、未来への夢が色づいてきた気がする。これまでは、研究分野を広げるのに焦りすぎたため、従来の研究を満足できるような形で区切ることができないまま、まだ蓄積の足りない領域に手を染めてしまい、やや性急に思うことも多々あったが、例年より三倍以上にも増えた忙しさのなかで、不勉強ながら、以下のいくつかの仕事を残すことができたことに、感謝しなければならない。学生時代から、常によりアドバイスを惜しまず与えてくださった恩師の方々、そして、仕事において、行き届かないことの多かった私を非難するどころか、助けの手を差し伸べてくださった同僚の方々に、この場を借りて、深く感謝を申し上げたい。

【掲載論文・書評など】

- ・「ジャンルの解体と融合——昭和期における谷崎の創作手法（Ⅰ）」『東京外国語大学論集』（第65集）2003年3月15日 151頁～174頁
- ・「差別の力学——李昂『夫殺し』を読む」『Trans-Cultural Studies』（第6号）2003年3月5日 135頁～143頁
- ・「混沌未分——日本近代文学における『小説』と『物語』について」『ALBA』2003年3月13日 37頁～43頁
- ・「SARSの告発——台湾のSARS問題からみえてくるもの」『現代思想』（7月号 第31巻第9号）2003年6月25日 113頁～121頁
- ・「破壊と再生——昭和期における谷崎の創作手法（Ⅱ）」『東京外国語大学論集』（第67集）2004年3月15日
- ・「〈知〉を隠蔽されし者のまなざし——台湾映画の担い手、呉念真がなげかけた問題」『Trans-Cultural Studies』（第7号）2004年3月（予定）
- ・「書評 『三島由紀夫 魅せられる精神』」『Trans-Cultural Studies』（第7号）2004年3月（予定）

【研究活動】

- * 「映像から観る台湾」——主催：蕭幸君。後援：東京外国語大学総合文化研究所。台湾をめぐる「歴史と記憶」あるいは「記憶と映像」をテーマとし、映像をとおして台湾の戦後を検証、台湾の表象／多文化・多言語の台湾／主権国家まで成長した台湾の歴史／

アジアおよび世界との関係、などについて討議する。5/14、6/11、7/9、10/15、11/12、計5回実施。

今回のプロジェクトは、多くのスタッフの支えがあつてこそ、無事に終えることができた。始終、フィルムや上映会の実施に尽力してくれた台湾文化研究会代表の謝佳玲、また、台湾文化に関心を寄せ、貴重な勉強の時間を割いてまで、ボランティアとしてきてくれた李冠賢、歐千華、林紋守、王書璇、吳欣璇、于佳琪、林思敏、そしてシンポジウムの開催に際して、協力してくれた長谷川賢、名越正貴、小田原琳、師玉真理、友常勉各位に、感謝を申し上げる。

- * 12/13、映画評論家の辻昭二郎氏、若手映画監督の小出正之氏、本学の佐藤公彦氏、アジアアフリカ研究所の三尾裕子氏らを、パネリストとして迎え、「映像から観る台湾」シンポジウムを開催した。

鈴木 聡

[論文]「変容と背信——ヴラジーミル・ナボコフの『アーダ』」（『東京外国語大学論集』第66号）。引き続き、「苦痛と呪縛——ヴラジーミル・ナボコフの『ロリータ』」が次号に掲載される予定。

[研究会] 京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の一環をなす「『翻訳』の諸相」第一研究班研究員として、二箇月に一度京都で行なわれる研究会に出席しております。ヴラジーミル・ナボコフの訳・註釈によるアレクサンドル・プーシキン作『エヴゲーニイ・オネーギン』を中心的なテキストとし、翻訳論全般にわたる諸問題について検討を加えつつありますが、今年度の成果は、年度末にまとめられる予定の報告書に掲載されることとなります。

[その他]『文化人類学文献事典』の項目執筆。

武田千香

《論文》

2003年3月「ソフィアの謎～『キンカス・ボルバ』のソフィア像についての一考察～」(単著、24頁)、東京外国語大学論集65号(pp.23-39)

《翻訳》

2003年7月Shuntaro Tanikawa, “Sobre alma” (「心について」), “Sorriso” (「ほほえみ」), “Três imagens” (「三つのイメー」), “Amanhã” (「明日」), “O recusar” (「拒む」), “E…” (「そして…」)(単訳、原文を含めて24頁の雑誌付録小冊子)、ET

CETRA、Curitiba, Travessa dos Editores.

《教科書》

2003 年 4 月 Mal e Sol - Curso básico de língua portuguesa (全 2 巻：第 1 巻 207 頁、第 2 巻 198 頁、共著 (Ronald Polito, 黒沢直俊)、東京外国語大学欧米第二課程ポルトガル語専攻本学第一年次用使用教科書)、発音解説およびダイアログを除く全部を執筆〔平成 14 年度学部教育研究特別経費（競争的経費）により作成〕。

《辞書・単語集》

2003 年 4 月『日本語から引く 知っておきたい ポルトガル語』（共編、全 447 頁）、小学館、p. 8 - 374 原稿作成および校正担当（黒沢直俊と共編）

2003 年 7 月 デイリー日葡英・葡日英辞典（共編、全 1048 頁）、三省堂、p.1 ～ 822 を Ronald Polito と共同担当（黒沢直俊と Ronald Polito と共編）

《書評》

2003 年 1 月 西永良成著『〈個人〉の行方—ルネ・ジラルと現代社会—』、『総合文化研究』第 6 号、東京外国語大学。

《その他》

◎ 2003 年 7 月「ブラジルという国 1 ～ 4」、NHK ラジオ短期集中講座テキスト「今日から話そう！ポルトガル語」p.24-25, p.38-39, p.52-53, p.66-67.

谷川道子

2003 年秋に東京ではほぼ同時並行的にドイツ演劇絡みの二つの演劇祭が開催された。

一つは 1990 年から活動している HMP（ハイナー・ミュラー・プロジェクト）主催で文化庁国際芸術振興基金の助成も受けた演劇祭「ハイナー・ミュラー・ザ・ワールド HM/W」。これは HMP の呼びかけに 18 の劇団・グループが応じて成立したもので、それぞれミュラーのテキストだけを素材に殆どがこの演劇祭に向けての新作を競演しようというもの。4 ～ 7 月に毎月プレゼンテーションの会議を重ね、10 ～ 12 月の二ヶ月にわたる麻布や神楽坂の Die Pratzte を中心にした四劇場での本番では各公演ごとにアフタートークも行なった。18 の上演グループは世代も（20 代から 60 代まで）地域も（中国、韓国、東京、北九州、名古屋、金沢、大阪）ジャンルも（現代演劇、能、舞踏、パフォー・マンス、等々）さまざまで、新しい演劇の可能性を探る興味深い試みや成果がいろいろにあった。関連シンポジウムも三つ。開幕時のそれにはドイツからレーマン教授とギリシアから演劇評論家でミュラー翻訳者でもあるヴァルポウロ女史も参加。演劇祭半ばには韓国と中国からの参加者をまじえての「アジアの中のハイナー・ミュラー」をめぐって、そして最後には総括のシンポジウム。これら全体の記録集の刊行も企画中。もう一つは両国シアター X での「2 年がかりのブレヒト的ブレヒト演劇祭」。これも文化庁支援事業として 10 ～ 12 月まで波状的に約 20 の多彩なプログラムが組まれて、レーマン教授を含めての開幕シンポジウムを始め、いくつかの企画を手

伝った。

両者との関連での寄稿や刊行された著作は以下の通り。

- *『鍊肉工房◎ハムレットマシーン【全記録】』（論創社）。：準備に8年をかけた1998年の鍊肉工房『ハムレットマシーン』上演に関する、その演出家岡本章氏の編著による記録集。討議や翻訳、論考などで参加しているが、ライブ・アートとして時空の中に「消えて」いく演劇の集団作業過程を記録として残していく意義は大きいと思う。
- *ハイナー・ミュラー詩『メモ 409』翻訳、論考「我らがハムレットたち―訳者の付記あるいはあらずもがなの付言」と「ハイナー・ミュラーってどんな人？」：HMPが継続して編集・発行している機関誌で、今回の演劇祭への特集号である「HMは可能か VI 特集：ハイナー・ミュラー／ザ・ワールド2003」の4～17頁に所収。この雑誌は全106頁立てで、全参加劇団の紹介とメッセージも収録。
- *論考「ハイナー・ミュラーってどんな人？」と「私はハムレットだった？ ―ハイナー・ミュラー／ザ・ワールド2003に寄せて」を、この演劇祭発行のパンフに寄稿。その他、演劇ガイドや各劇団のいくつかのちらしにも短文を寄稿。
- *「閨からの思考―『ハムレットマシーン』上演によせて」：名古屋七つ寺スタジオ機関誌所収。
- *「1990年から2001年へ―「私」／HM／Wの媒介項は今どう立て得るのか…」、
「可能性としての〈演劇〉、あるいは〈ポストドラマ演劇〉？」、「ハイナー・ミュラー協会のことなど…」、「ドイツのあれやこれやの演劇（制度）事情・・・」、「追悼 岸田理生さんへ」；それぞれ「HMW ニュースレター」第1～5号所収。
- *劇評「2年がかりの〈ウイ〉探しはどこに着地するのだろうか？」：シアターX「批評通信」に所収。
- *シアターXブレヒト的ブレヒト演劇祭2003参加作品：多和田葉子+高瀬アキ『ブレ・Brecht』への管啓次郎氏との批評対談：シアターX「批評通信」ブックレットに掲載。

その他の2003年刊行の論考や仕事としては――

- ・演劇鼎談 谷川道子 x 寺尾格 x 新野守広「ベルリン演劇の〈今〉」（DeLi 2号―特集ベルリンの壁を開く」、114～134頁所収）：この雑誌は、紹介すべきドイツ語圏の文化・文芸の新しい潮流は豊富にありながらそれを伝える媒体が中々ない状況に棹さず決意で、池田信雄氏を編集長に、定期購読者による基金を基に沖積舎より2003年から季刊として新たに刊行されたもの。3号雑誌にならないためにさらなる定期購読者を募集中！
- ・「歴史と記憶をめぐる演劇表象の今を問う―〈ラオコーン演劇祭〉の位相」、およびハンス＝テイス・レーマン論考翻訳「遅延と思索―経済的時間への抵抗」：京都造形芸術大学舞台芸術研究センター編集・発行「舞台芸術」第4号、173～190頁および98～102頁。
- *『現代ドイツの社会・文化を知るための48章』（明石書店）の169-174、195～201頁に、第37, 38, 44, 45章の思想・文化・演劇の章を執筆。
- ・「グローバル時代の国際演劇祭――第1部 ドイツにおける〈世界演劇祭〉」「世界文学」（世

界文学会発行) 第97号, 74-84頁。

- * 書評「ギュンター・グラス『私の一世紀』」; 生活クラブ生協機関誌「本の花束」所収。
- ・ “Blick auf Deutschland – Japanische Theatermacher zwischen den Weltkriegen”; In “Kultur als Fenster zu einem besseren Leben und Arbeiten”, hrsg.von der Fritz Hueser-Gesellschaft unter der Leitung von Volker Zaib, S.443-456, Aisthesis Verlag,Bielefeld 2003, 12.
- ・ “Heiner Mueller Rezeption in Japan”; In “Heiner Mueller Handbuch”, hrsg.von Hans-Thies Lehmann u. Patrick Primavesi, S.378-379,J.B.Metzler Verlag,Stgt.; 2003.12.

ついでにお願いをかねての宣伝を。調布市文化コミュニティ振興財団から本学大学開放企画室への依頼により、2003年春から半年に一度のサイクルで調布市民カレッジ「地球ナビゲーション」を本学が中心になってオーガナイズすることとなり、すでに5～6月は増谷英樹・篠原琢・山口裕之・小原雅俊・関口時正各氏と谷川の6名で「中欧」を、10～11月には杳掛良彦・岩崎務・林佳世子・ルーセル、フランソワ・杉浦勉・岡村多希子各氏の6名で「地中海沿岸ヨーロッパ都市」を好評開催。今後も北欧、南北アメリカ大陸、アジア、アフリカ、イスラム文化圏などの形で繋いでいく予定なので、その節はよろしく願います。

土佐桂子

【発表論文等】

・ 科研報告書

「ビルマにおけるジェンダー・イデオロギー再考——民間治療とウェイザー信仰の場」『ジェンダーをめぐる現代社会の価値と規範の研究』（代表者：光末紀子、課題番号12490022）平成12年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書、2003年6月、p.159-p.177

【その他】

- ・ 「生活に根付く暦（巻末鼎談・渡邊欣雄、宮崎恒二、土佐桂子）」『国際交流』99:99-101。（2003年4月）

宇戸清治

この一年間は、二〇〇四年度に発行予定の本の執筆・監修と資料収集を中心に活動した。具体的には三省堂『デイリー日タイ英・タイ日英辞典』と、小峰書店『世界の文字と言葉

入門：タイの文字と言葉』である。

一月にCEO「史資料ハブ地域文化研究」関係の公用でタイへ出張、九月には資料収集と交流協定大学との定期協議のためにタイへ海外研修に赴いた。

【翻訳】

プラープダー・ユン「存在のあり得た可能性」（『新潮』2004年3月号）

【その他】

「世界の文学タイ—『トーンデーン物語』『都会の犬』」（東京新聞2003年11月28日夕刊）
「アジア新世代が変える文学—スピードとビジュアル化。まだ見ぬ文学の形がここにある」（『STUDIO VOICE』2003年9月号）

【公開講座】

東京外国語大学公開講座「タイ語」、2003年10月17日。

八木久美子

【論文】

2003年3月「イスラム世界の見た9月11日——エジプトの例を中心に——」『9・11テロと大学』大正大学研究論叢 第11号 pp.45-78.

2003年3月‘Women’s Position in Contemporary Muslim Society’, Women and Religion, Tenri Yamato Culture Congress & The Center for Women and Religion, Graduate Theological Union, Berkeley, pp. 51-62.

【その他】

2003年5月「現代と宗教——イスラムの視点——」『そうせい』121号、全国曹洞宗青年会、pp11-12

2003年8月「現代と宗教——イスラム原理主義ということばについて考える——」『そうせい』122号、全国曹洞宗青年会、pp12-13

【学会発表】

2003年9月5日「イスラム教徒から見る他者像」日本宗教学会 於・天理大学

【講演、公開講座】

2003年5月16日 真言宗神奈川自治布教団研修会「イスラームの基礎知識」 於：ホテル横浜ガーデン

2003年11月5日「神とはどこで出会えるのか—イスラム教徒の場合」東京外国語大学公開講座『世界の神々』 於：東京外国語大学

2003年11月11日 沼南町オープン・カレッジ「イスラム教と世界の宗教」 於：沼南町中央公民館

山口裕之

【著書】

『ベンヤミンのアレゴリー的思考』人文書院、2003 年 2 月

【論文】

「語ること・演じることの転換——メディアにおける技術性・身体性・魔術性」、『総合文化研究』（東京外国語大学総合文化研究所）第 6 号（2002）、2003 年 3 月、68 – 85 頁

【辞典項目】

鈴木隆雄『オーストリア文学小百科』水声社、2004 年 1 月、「カール・クラウス」、「炬火」、「フランツ・ヤノヴィッツ」等 7 項目

【フォーラム・講演】

「DAAD 友の会日独フォーラム」実行委員 2003 年 3 月 25 – 27 日、東海大学山中湖セミナーハウス

調布市民カレッジ「地球ナビゲーション」第四回：「ウィーン」像を読む——オーストリアの歴史と文化 2003 年 6 月 7 日、調布市文化会館

【その他】

(研究関連)

「谷川道子他訳『ポストドラマ演劇』」（書評）、『総合文化研究』（東京外国語大学総合文化研究所）第 6 号（2002）、2003 年 3 月、186 – 187 頁

〈DAAD 友の会日独フォーラム 2003〉報告、『ドイツ研究』（日本ドイツ学会）第 36 号（2003 年）32—34 頁

「パサージュとヴァルター・ベンヤミン」、『InterCommunication』（N T T 出版）47 号 Winter2004（特集 CODE / コモンズ / ソフトウェア鈴木隆雄『オーストリア文学小百科』水声社、2004 年 1 月、「カール・クラウス」、「炬火」、「フランツ・ヤノヴィッツ」等七項目創造の原理と権利）80 – 83 頁

(エッセイ)

「クルト・ヴァイル 交響曲第二番」（プログラムノート：新交響楽団第 181 回演奏会、2003 年 4 月 27 日）

「R. シュトラウス 「四つの最後の歌」」（プログラムノート：新交響楽団第 182 回演奏会、2003 年 7 月 20 日）